

時の感覚

牧師 山本 護



教会歴では、新しい年に入ってから降誕後二主日までクリスマスの余韻が続き、その次が顕現日(公現祭)。クリスマスリースはそれまで飾られます。礼拝堂の扉に取りつけられたクリスマスリースから小径(こみち)が続いている。いや小径からリースへ、か。降誕から出発するのか、降誕に辿り着いたのか、時の流れはといったどちらでしょうか。

「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えら

れる(コリント3:11)」。私たちが「永遠」を思う時、時は未来にも過去にも延長されるでしょう。とはいえ想像力で届きうる距離はあまりに短い。天文学に教えられて地球や宇宙の起源は数百億年、といった単位で時を精一杯拡張しても、永遠はかえって離れていく。

「日は昇り、日は沈み、あえぎ戻り、また昇る(1:5)、かつてあったことは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起る。太陽の下、新しいものは何ひとつつない(1:9)。時をこのように、いわば円環として捉えたとしても「何もかも、もの憂い。語り尽くすこともできず、目は見飽きることなく、耳は聞いても満たされない(1:8)」。

「キリスト、瞬間」。私の師 50歳年長の山本三和人牧師がアフォリズム(警句)のようにふとつぶやいたことがあり、それを折々に思い起こします。文学徒でもあった師はカフカの言葉だと言っていましたが出典は不明。師らしいとぼけた韜晦(とうかい)から、カフカに仮託して自らの直感を語ったのかもしれませんが。

「初めから聞いていたことを心にとどめなさい。初めから聞いていたことがあなたがたの内にいつもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にいつもいるだろう。これこそ御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命なのだ(1ヨハネ2:24~25)」。

キリストは瞬間であり、永遠。過去や未来へ延長される水平時間に限定されず、そしてまた、もの憂い円環の時間にも納まらない、垂直の瞬間にして永遠。私たちが瞬間なる御子の内に居て、永遠なる御父の内に居るのは、「初めから聞いていたこと」が私たちに捉えて離さず、「古くて新しい掟(2:7~8)」が心にとどまっているからです。

瞬間の命、永遠の命だからといって、私たちが地上から浮きあがって透明になるわけではありません。むしろキリスト者は、聖霊に吹かれるがゆえに、いっそう多彩な命のグラデーションを獲得する。その一方で、クリスマスリースへ辿り着いた過去からの永遠、ここから伸びている未来への永遠を思い描くと、ひどく懐かしいような感じを覚えます。そして地上に在るいくらかゆるい今が、改めて愛おしくなりました。Ω